

平成 30 年 6 月 22 日現在

機関番号：32705

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26350052

研究課題名(和文) 成人女性の未来展望における喪失感と獲得感-ひとりの受容、つながりの形成との関連-

研究課題名(英文) Consciousness of loss and acquisition in the future outlook of middle-aged women
: The relationship between the acceptance of being alone and the formation of ties

研究代表者

大石 美佳 (OISHI, Mika)

鎌倉女子大学・家政学部・准教授

研究者番号：80298249

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、50歳前後の成人女性の未来展望と未来展望に影響を及ぼす要因について、アンケート調査により実証的に検討することを目的とした。その結果、高齢期におけるソーシャルサポート期待は、子ども(とくに娘)とパートナーに対して高く、社会サービスに対して低いことが示された。将来における獲得感、喪失感については、加齢によって心身の機能や社会とのつながりを失っていきと感じている一方で、内面的には充実していくという感覚を持っていることが示された。さらに、これらの未来展望は、現在の生活状況や心理的発達(「個」の発達、「関係性」の発達)と密接に関連していることが明らかになった。

研究成果の概要(英文)：This study was conducted to empirically investigate the future outlook of middle-aged women around the age of 50 and the factors that affect this future outlook using a questionnaire-based survey. The results showed that adult women had high expectations that their children, especially daughters, and partner would provide them with social support in old age, but low expectations of receiving support from social services. In terms of future consciousness of loss and acquisition, the women felt that they would gradually lose mental and physical function and ties to society as a result of aging, but had the sense of ongoing internal fulfillment. These future prospects were also found to be closely related to the women's current living conditions and psychological development.

研究分野：複合領域

キーワード：中年期女性 「個」の発達 「関係性」の発達 未来展望 獲得感 喪失感 ソーシャルサポート期待
ひとりの時間

1. 研究開始当初の背景

平成 24 年度版『高齢社会白書』によれば、高齢化率は今後も上昇を続け、2055 年には 40.5%に達し、国民の 2.5 人に 1 人が高齢者という社会の到来が予測されている。高齢化の進行とともに、1970 年代以降、生涯発達の観点から成人発達への関心が高まり、わが国においても中年期、高齢期に関する研究が蓄積されてきた。同時にこれまでの生涯発達理論の多くが、暗黙のうちに男性を規範としてきたことへの批判的検証も含め、女性のライフコースに焦点をあてた発達研究が盛んになってきている。これらの研究は、成人期の発達過程を「個」としての発達と「関係性」の発達の双方の視点からとらえることの重要性を指摘している。

高度に発達したグローバル資本主義経済のもとで急速に進展した日本における少子高齢化や労働環境の変化は、家族の形成と維持にも大きな変動をもたらした。現在の中年期世代が高齢期を迎える頃には、ひとり暮らしの高齢者の急増が見込まれており、このような状況においては、安達(2010)が指摘するように、家族周辺外に置かれうる高齢者を「個」としてとらえたところから、家族及び非家族との関係性をみていく視点が不可欠となる。従来は青年期の発達課題であった個の「自立」が、新たな意味合いを帯びて、成人期以降も重要なテーマになったといえる。とくに、女性高齢者のひとり暮らしは、2040 年には 24.5%まで上昇すると予測されている。少子高齢化のいま、女性にとって“家族する期間”は短縮し、いずれはひとりになることを想定した将来設計の重要性が増してきている。

従来、家族との関係性のなかに自己のアイデンティティを見出してきた日本の成人女性にとって、“ひとりになること”に対する覚悟や準備、家族を超えた関係性の形成は、新たに発生した課題であり、このような発達課題にどのように対応していくのが、今後の高齢期における心理的 well-being にも大きく影響するものと考えられる。

エリクソンらのライフサイクル理論において高齢期の発達課題とされている「自我の統合」は、「喪失(体験)」と「獲得(体験)」の統合的過程ともとらえられる。50 歳前後は、中年期危機という言葉が示すように、心身、職業、家族など様々な次元で不安定な要素の多い転換期、発達の危機期である。体力の低下、時間的展望の狭まり、老いや死への直面のような喪失や衰退といったネガティブな変化を契機として、自己のあり方や生き方・アイデンティティの問い直しと再構築が行われることが多い。移行期の心理的 well-being を高めるためには、喪失という側面だけではなく、自由な時間や新しい友人など、獲得という側面に対する視点も必要であると考える。

2. 研究の目的

本研究では、人生の折り返し地点にある 50 歳前後の成人女性が現在どのような生活状況にあるのか、また、どのような未来展望をもっているのかを明らかにし、未来展望に影響を及ぼす要因について、「個」の発達と「関係性」の発達の 2 つの側面から、数量調査によって実証的に検討することを目的とした。

3. 研究の方法

成人女性の生活意識と未来展望に関する予備調査(2014 年と 2015 年に実施)の結果をもとに調査項目を選定し、2016 年 8 月にクロスマーケティングのアンケートモニターを利用して、関東 1 都 6 県に在住する 50 歳代の女性 1000 名を対象に WEB によるアンケート調査を実施した。

調査内容は、現在の生活状況(年齢、家族状況、就労状況、社会的活動への参加状況、世帯年収、健康状態(1 項目、5 件法))、心理的適応(主観的幸福感(「人生の満足度尺度」: Diener, Emmons, Larsen & Griffin (1985)大石(2009)訳、5 項目、5 件法))、心理的 well-being(心理的 well-being 尺度: 西田(2000)の 4 次元(下位尺度)を使用、計 27 項目、6 件法)、ひとりの時間のとらえ方(「中年期版ひとりで過ごすことに関する感情・評価尺度」: 増淵(2016)、3 因子、20 項目、7 件法)、将来展望(高齢期のひとり暮らしのイメージ(1 項目、5 件法)、高齢期のソーシャルサポート期待(14 項目、6 つのサポート源別、4 件法)、これからの人生における獲得感(8 領域、28 項目、4 件法)、これからの人生における喪失感(8 領域、28 項目、4 件法))である。

4. 研究成果

(1) 現在の生活状況

家族状況について、1000 名中 697 名(69.7%)が既婚で、628 名(62.8%)に子どもがいた。配偶者の有無と子どもの有無による家族構成をみると、多い順に、夫と子どもがいる人は 535 名(53.5%)、未婚で子どももいないシングルの方は 210 名(21.0%)、夫はいるが子どももいない人は 162 名(16.2%)、夫はいるが子どももいない人(シングルマザー)は 93 名(9.3%)であった。これらの結果から、50 歳代女性のライフスタイルの多様性がうかがえた。

就労状況は、有職者は 606 名(60.6%)で約 6 割が就労していた。就労している人の就労形態は、多い順に、非正規 330 名(54.5%)、正規 193 名(31.8%)、自営/自由業 83 名(13.7%)であった。また約 4 割が何らかの社会的活動に参加していた。世帯年収は 600 万円未満が 470 名(47.0%)、600 万円以上が 530 名(53.0%)であった。健康状態得点の平均は 3.42 ($SD=1.00$)、主観的幸福感得点は平均 14.09 ($SD=3.87$)であった。

(2) 50 歳代女性の心理的発達

1) 「個」の発達: 「自律性」, 「自己受容」, 「ひとりの時間のとらえ方」

「個」の発達の測定には、西田 (2000) の「心理的 well-being」尺度の下位尺度のうち「自律性」(8 項目)と「自己受容」(7 項目)を使用した。また、増淵・松永・大石 (2016) の「中年期版ひとりで過ごすことに関する感情・評価尺度」(以下、「ひとりの時間のとらえ方」)を使用した。

まず、「自律性」, 「自己受容」について、「自律性」は 3.98 ($SD=0.62$)、「自己受容」は 3.78 ($SD=0.72$)で、いずれも理論的中間点 (3.5)よりはやや高かった。「自律性」(8 項目)のうち、4 点以上の項目は「私は、自分の行動は自分で決める」, 「重要なことを決めるとき、他の人の判断に頼る」(逆転項目), 「自分の生き方を考えるとき、人の意見に左右されやすい」(逆転項目)の 3 項目であった。「自己受容」7 項目のうち、4 点以上の項目は「私は自分の生き方や性格をそのまま受け入れることができる」, 「良い面も悪い面も含め、自分自身のありのままの姿を受け入れることができる」の 2 項目であった。両下位尺度とも 3 点(「ややあてはまらない」)以下の項目はなかった。

つぎに「ひとりの時間のとらえ方」について、「自立願望」(4.63, $SD=0.94$)と「充実・満足」(4.83, $SD=0.96$)は理論的中間点(4)より高く、「孤独・不安」(2.52, $SD=0.95$)は低かった。「自立願望」と「充実・満足」では 4 点(「どちらともいえない」)以下の項目はなかった。「孤独・不安」の項目はすべて 2 点台(「ほとんどそう思わない」)であった。

2) 「関係性」の発達: 「環境制御力」, 「積極的な他者関係」

「関係性」の発達の測定には、西田 (2000) 「心理的 well-being」尺度の下位尺度のうち「環境制御力」(6 項目)と「積極的な他者関係」(6 項目)の 2 つの下位尺度を使用した。

「環境制御力」は 3.98 ($SD=0.64$)、「積極的な他者関係」は 3.63 ($SD=0.67$)で、いずれも理論的中間点 (3.5)よりやや高かった。「環境制御力」6 項目のうち、4 点以上の項目は「私の今の立場は、様々な状況に折り合いをつけながら、自分で作り上げたものである」, 「状況をよりよくするために、周りに柔軟に対応することができる」, 「私は、周囲の条項にうまく折り合いをつけながら、自分らしく生きていくと思う」の 3 項目であった。「積極的な他者関係」6 項目の中に、4 点以上の項目はなかった。両下位尺度とも 3 点(「ややあてはまらない」)以下の項目はなかった。

(2) 50 歳代女性の未来展望

1) ひとり暮らしの可能性に対する意識

高齢期における生活をイメージしたとき、

自分が一人で暮らすことを考えたことがあるかについてたずねたところ、7 割近くの人が考える(「時々考える」, 「よく考える」)と回答した。65 歳以上の女性の単身世帯は 2015 年の 21.8%から 2040 年には 24.5%まで上昇すると見込まれており、高齢期のひとり暮らしは現実的な問題としてとらえられているようである。

2) 高齢期におけるソーシャルサポート期待

将来の人間関係について、高齢期の生活をイメージしたときに、まわりの人々からどのようなサポートが受けられると思うかをたずねた。「高齢期におけるソーシャルサポート期待」(以下、「ソーシャルサポート期待」)尺度は、先行研究を参考に独自に作成した。ソーシャルサポートを「情緒的サポート」, 「コンパニオンシップ」, 「手段的サポート」, 「情報サポート」, 「承認」の 5 領域に設定し、計 14 のサポート内容を選定した。14 のサポート内容それぞれに対して、6 つのサポート源(「パートナー」, 「息子」, 「娘」, 「きょうだい」, 「友人」, 「社会サービス」)別に、「まったくそう思わない」, 「あまりそう思わない」, 「まあそう思う」, 「とてもそう思う」の 4 件法で回答を求め、得点化し、「ソーシャルサポート期待」得点を算出した。

パートナーと子ども(娘、息子)のいる人(184 名)の結果から全体の傾向をまとめると、6 つのサポート源のうち「ソーシャルサポート期待」得点の合計得点をもっとも高かったのは「娘」(37.92)に対してで、次いで「パートナー」(35.84)、「息子」(34.33)であった。もっとも低かったのは「社会サービス」(28.88)に対してであった。サポート内容 14 項目についてみると、14 項目中 11 項目は「娘」に対する期待が一番高かった。「病気のときに世話をしてくれる」, 「経済的に困っているときに頼りにできる」の 2 項目については「パートナー」に対する期待がもっとも高く、「趣味や娯楽を一緒に楽しむ」は、「友人」に対する期待がもっとも高かった。

これらの結果から、高齢期のソーシャルサポート期待は家族(パートナー・子ども)に対して高く、友人にはコンパニオンシップの機能、社会サービスには手段的なサポートを期待していることがうかがえた。

家族状況別の分析からは、家族状況が多様化している現在において、家族以外のサポート源をもつことの重要性がうかがえた。家族を超えた友人や社会とのつながりをどのように形成するのかについて検討することが今後の課題である

3) これからの人生における獲得感と喪失感

これから先の人生で得るという感覚(獲得感)、失うという感覚(喪失感)についてたずねた。大石・松永 (2015) で作成した尺度を使用した。「心身機能」(3 項目)、「人間関係」(4 項目)、「時間」(5 項目)、「社会・経済」(3 項目)、「心理的充足」(5 項目)、「自己決定」(3 項目)、「社会的関心」(2 項目)

「生きがい」(3項目)の8領域、計28項目からなる。

獲得感28項目の中で、3点以上の項目は、「自由な時間」3.03 ($SD=0.64$)であった。獲得感の領域別得点がかつても高かったのは「自己決定」2.59 ($SD=0.60$)であった。獲得感がかつても低い領域は、「社会・経済」2.11 ($SD=0.61$)であった

一方、喪失感では、3点以上の項目は「体力・身体機能」3.40 ($SD=0.61$)、「知的な能力」3.05 ($SD=0.68$)、「気力・意欲」3.04 ($SD=0.68$)の3項目で、これらはいずれも「心身機能」領域の項目であった。喪失感の領域別得点は「心身機能」3.16 ($SD=0.58$)がかつても高く、「人間関係」2.36 ($SD=0.67$)がかつても低かった。

獲得感と喪失感の領域別得点に差があるかについて検討するために t 検定を行った。その結果、「心身機能」、「人間関係」、「社会・経済」、「社会的関心」、「生きがい」は喪失感が獲得感より有意に高く、「心理的充足」、「自己決定」は喪失感より獲得感が有意に高かった。これらの結果から、50代女性はこれから先の人生において、加齢によって心身の機能や社会とのつながりを失っていくと感じている一方で、内面的には充実していくという感覚を持っていることが示された。

(3) 未来展望に関連する要因

未来展望に関連する要因について相関分析によって検証した。その結果、将来における獲得感・喪失感は、現在の生活状況や心理的発達と密接に関連していることが明らかになった。現在の生活状況との関連からは、健康状態がよく、社会的活動に積極的で、幸福感を感じている人ほど、獲得感が高まり、喪失感は低まる傾向がみられた。また、心理的発達との関連からは、「個」と「関係性」どちらにおいても適応的な人ほど、獲得感が高くなり、喪失感が低くなる傾向がみられた。

これらの結果から、現在の生活状況を基盤として、未来を展望していること、「個」と「関係性」の2側面での心理的発達の高さが肯定的な未来展望へとつながることが示された。現在の生活状況がよい状況にない人は将来に対しても期待や希望が低まる傾向があることから、現在の生活状況に対するサポートは、現在の well-being を改善することにとどまらず、将来における展望までを含め、長期的な well-being の向上に寄与するといえよう。

未来展望に関連する諸要因の影響のプロセスに関する分析は今後の課題であるが、成人女性の生涯にわたる well-being の実現に向けて、有益な知見を得ることができたと考える。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計3件)

大石美佳・松永しのぶ、成人女性の生活意

識と将来展望 - 高齢期におけるソーシャルサポート期待の予備的検討 -、鎌倉女子大学紀要、査読有、25、123-130、2018

増淵裕子・松永しのぶ・大石美佳、中年期女性における「ひとりの時間」の意味 - 青年期との比較 -、昭和女子大学生活心理研究所紀要、査読有、18、31-43、2016

大石美佳・松永しのぶ、成人女性の生活意識と将来展望 - 喪失感と獲得感の予備的検討 -、鎌倉女子大学紀要、査読有、22、43-50、2015

〔学会発表〕(計5件)

大石美佳・松永しのぶ、成人女性の生活意識と将来展望 - 獲得感と喪失感からの検討 -、日本発達心理学会第29回大会、2018

増淵裕子・松永しのぶ・大石美佳、成人期女性における「ひとりの時間」の検討 - 質的分析および心理的適応との関連 -、日本発達心理学会第29回大会、2018

松永しのぶ・大石美佳、成人女性の高齢期におけるソーシャルサポート期待 - 子どもの性別による検討 -、日本発達心理学会第29回大会、2018

松永しのぶ・大石美佳、成人女性の生活意識と将来展望 - 高齢期におけるソーシャルサポート期待に着目して -、日本発達心理学会第27回大会、2016

大石美佳・松永しのぶ、成人女性の生活意識と将来展望 - 「喪失」と「獲得」に対する意識の検討 -、日本発達心理学会第26回大会、2015

〔その他〕

大石美佳・松永しのぶ、成人女性の未来展望における喪失感と獲得感 - ひとりの受容、つながりの形成との関連 -、平成26年度~29年度科学研究費助成事業(学術研究基金助成金)基盤研究C 研究成果報告書、2018

6. 研究組織

(1) 研究代表者

大石 美佳 (OISHI, Mika)
鎌倉女子大学・家政学部・准教授
研究者番号：80298249

(2) 研究分担者

松永 しのぶ (MATSUNAGA, Shinobu)
昭和女子大学・生活機構研究科・教授
研究者番号：50300033

(3) 研究協力者

増淵 (海野) 裕子
(MASUBUCHI (UMINO), Yuko)